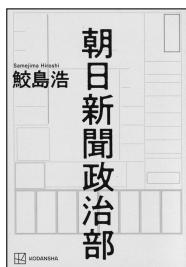


# ブックレビュー



## 『朝日新聞政治部』

鮫島 浩 著

講談社 刊 (TEL03-5395-3615)

定価1,980円 (本体1,800円+税)

各章の扉の裏に、日本ABC協会データに基づく全国紙朝刊販売部数が記されている。その一覧によれば、1994年に『朝日』はおよそ822万、『読売』は1,003万、『毎日』は400万、『産経』は191万各部を誇っていた。

これが2021年にはそれぞれ466万、710万、199万、114万各部と軒並み激減している。急速に進展するデジタル・メディアの波に吞まれ、退潮を余儀なくされる活字メディアの現状が、これらの数値からも明らかだ。

しかし、その趨勢を辿るのが本書の主題ではない。

昨年春に『朝日』の早期退職制度に応じて退職し、ウェブメディア「SAMEJIMA TIMES」を創刊した政治部出身記者が「すべて実名で綴る内部告発ノンフィクション」として上梓している。鮫島は1971年生まれ。京大法学部を卒業して『朝日』に入社し、39歳で政治部次長(デ

スク)に。2012年には特別報道部デスクとして福島原発事故の「手抜き除染」報道で新聞協会賞を受賞するなど栄光の道を通る。

その勢いで取り組んだ原発事故を巡る「吉田調書」のスクープと報道が、当時の安倍政権や支持勢力から「誤報」「捏造」と攻撃される。折りも折れ、『朝日』は過去の「慰安婦」報道やその対応の遅れを批判した「池上彰」のコラム掲載拒否を巡り、社内外から厳しい批判を浴びていた。

創業以来の危機に直面した『朝日』経営陣は、この難局にどう動いたか。本書は鮫島の駆け出し時代に遡り、政治部記者と政治家との濃密な関係などをひも解きながら、「吉田調書」報道の責任を問われて社内処分を追いつままれていく顛末を辿る。

マスメディアの権力監視機能が劣化している今日、いまさらながら『朝日』よ、お前もか!」の感が深く、翼賛化する時代の闇は濃くなるばかりだ。

さんかいの げん  
(山海野 玄)